

新しい図書館 4つのポイント

市が目指す図書館機能の進化を、4つの柱から読み解きます。

01 宅配サービス運用 →P.4

現行のシステムや運用改善だけでは、課題解決が困難となっています。そこで、宅配サービス「おうち図書館」の運用を開始しました。

03 新たな読書ツール →P.8

本を読む場所もカタチも自由に。スマートフォンやタブレット、パソコンでいつでも読書が楽しめる電子図書館は、通勤中や隙間時間にもぴったりです。新しい読書習慣、はじめてみませんか？

02 読書環境を整備 →P.6

読書は人が豊かに生きる上で大きな意義を持ちます。市立図書館は、現在のみならず未来にわたって社会環境の変化に対応した図書館であり続けます。

04 学校図書館を共用 →P.9

読書文化醸成の役割は学校教育も担うべき課題です。清瀬市教育委員会は学校を地域コミュニティの中核と位置づけ、市民に学校図書館を開放し、居場所や学びの場とする取り組みを試行しています。

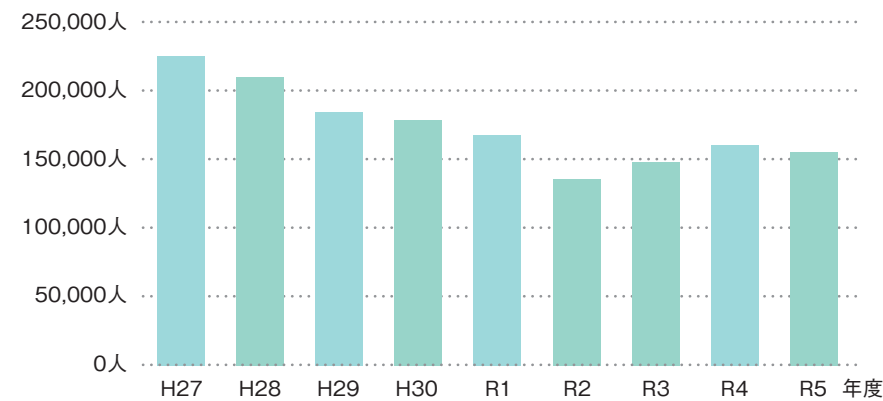


読書のスタイルは、時代とともに変化しています。かつては貸出上限である10冊を借りる利用者が多く見られましたが、現在の平均貸出数は約3冊程度となっています。貸出者数も減少傾向にあります(図1)。特に高齢者や働く世代の利用が少なくなっています(図2)。

こうした状況を受け、清瀬市では宅配型の貸出サービス「おうち図書館」を導入

未来へつなぐ
本とまちの物語

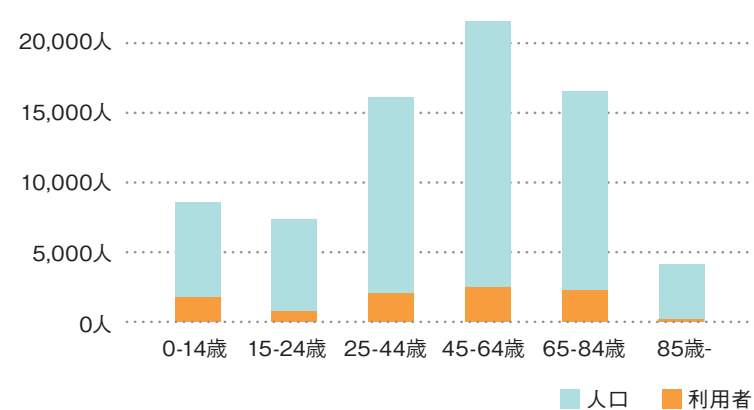
図1) 貸出者数 コロナ禍を経て若干回復したものの、減少傾向にある



図書館機能が進化しても、本がそばにあり、誰かの心を動かす読書の風景はこれからも続いています。清瀬市における図書館利用の今と未来、その変化と新たな挑戦をたどります。

本と、まちと、
暮らしていく

図2) 年代別利用者数 高齢者や働く世代の利用が少ない



しました。これまでは、障がいのある方など来館が難しい方を対象としていましたが、令和7年4月1日から市民全体が利用できるよう、サービスの対象を拡大しています。

「おうち図書館」の運用など、建物に依存しない新たな図書館サービスのカタチが生まれつつあります。「図書館には行けないが、本は本を読みたかった」という方々にも読書の機会が広がっており、これからも清瀬市の読書環境を支える大切な役割を担っていきます。

読書は、知識や教養を身につけるだけでなく、言葉による自己表現力や他者との関係性を育むうえでも重要な役割を果たしています。特に、子どもたちが多様な言葉にふれ、語彙を増やしていくことは、豊かな感性や価値観の形成につながります。

本を読むことで、自分では使わない言葉に出会い、それを使いこなす力が身につきます。これは、自分の考えや気持ちを他者に伝える力を育む土台ともなります。

「気持ち伝えるには、言葉が欠かせません」と、清瀬市立図書館の山口館長。図書館では、こうした言葉の力を大切にした読書支援を行っています。

言葉にふれて、
自分に出会う